

令和8年度

帝塚山学院泉ヶ丘中学校  
入学者選抜試験問題

1次A入試

国語

(試験時間60分)

受験番号	
------	--

## 注意事項

- ・文字は大きく、ていねいに書くこと。
- ・解答用紙の枠<sup>わく</sup>からはみ出さないように書くこと。
- ・字数制限のある問いは、記号や句読点も一字と数えるものとする。

□ 次の文章は、小学校五年生の女の子「律」（「私」）が、友達「麗ちゃん」「久美ちゃん」と別れ帰宅した場面から始まる。よく読んで後の問いに答えなさい。

「おかえり、律」

「ただいま。どうしたの、今日は早いなだね」

「うん、明日から出張だから今日は午前だけなんだ」

「そうなんだ、気をつけて行ってきてね」

「そう答えて二階の子供部屋へ向かおうとした。」

「ん、律、ちよつと待ちなさい」

急に呼び止められ、私は振り返って父を見上げた。

「なに？」

「この前あげたCD、聞いているかい？」

私は少しびくりとして、父の喉元あたりに視線を彷徨わせながら、

「うん、聞いているよ」

と答えた。

①「① そうか、うん、うん、シューベルトはやつぱりいいだろう。今度、また新しいのを買ってきてあげるからな」

父は満足そうに何度も頷いた。父は私の②「②」情操教育に熱心だった。子供向けのクラシックのCDを買ってきては、私に与えたり、書齋に呼んで延々と絵画の写真を見せられたりした。私はそれがあまり得意ではなかった。「どうだった、律？」としつこく感想を尋ねられても、私は何も思い浮かばなかった。父が今にもCDの感想を聞こうとしているのがわかり、私は急いで言った。

「ねえ、お父さん、父の日は、なにがほしい？ ネクタイは去年あげたし、万年筆は買ったばかりでしょ」

「ん？ そうだなあ、律がくれるものなら何でもうれしいよ」

そういうと、父は目を細めて私の頭を撫でた。

「律、帰ってきたのに手も洗わないで何してるの。宿題はないの？」

台所から母の声が聞こえてきて、私ははい、と大きな声で返事をした。母のいつものお小言だった。煩わしいと思うことはあるものの、私は自分をきちんとしてつけてくれる母と父が好きだった。自分は正しいものにしつかり守られて成長しているんだという安心感があった。私は父に与えられたCDはいつも真面目に全て聞いたし、車の一台もない夜の横断歩道でも、信号が青になるまでいつもきちんと待った。お釣りが十円多ければ、わざわざ歩いて駄菓子屋さんまで返しに行ったし、夏休みの宿題は、かならず最初の一週間で終わらせた。

周囲の大人たちは大抵、そんな私を「とつてもいい子ねえ」と褒めた。私はそれがいつも嬉しかった。私は母に与えられたワークブックを開いた。予習や復習するのは嫌いではなかった。母は、一カ月間で終わらせなさい、と言ったけれど、私はこれを二週間で終わらせると決めていた。こういう②小さなサービスを忘れないことが、今の居心地のよい家の雰囲気を守っていくための手段であるかのような気がしていた。

台所からは、私の好きなデミグラスソースの香りが漂い始めていた。

「そういえば、律ちゃんって、どこにもつけてないの？」

不意に麗ちゃんがそう言ったとき、私は日記か何かのことかと思って、

「え、何を？」

と尋ねた。麗ちゃんは少し笑うと、桃色のカットソーの袖口をめくった。そこには、ピンクと白の小さいビーズでできたブレスレットがはめられていた。

似たようなブレスレットをクラスの女の子達がつけているのを、私は見たことがあったので、

「ああ」

と間の抜けた声を出した。よく見かけるなあとは思っていたけれど、麗ちゃんまでつけているとは思わなかった。

「私、久美ちゃんと色違いなんだ」

③「へえ、そうなんだ……可愛いね」

心にもない相槌をうつと、麗ちゃんは、

「ふうん、律ちゃんってあんまりこういうのに興味ないと思ってた」

とって笑った。事実だったので口ごもっている、チャイムが鳴った。麗ちゃんはさっと袖口を隠して、早足で自分の席へ戻っていった。素早く何かを先生から隠すその仕草は、私のほとんどしたことの無い仕草で、逆に華やかな女の子たちがしよつちゆうする動きだったので、私はなんとなくあせった気持ちになった。

私は力なく席についた。何気なく、同じ班の女の子の手首を見て廻ると、ほとんどの女の子の手首にカラフルなビーズのそれがはめられていた。

私はその日一日、ノートの切れ端に、ビーズのブレスレットをつけている女の子の人数を、正の字でつけていった。三つも四つもつけている子もいれば、よく見ると足首につけている子もいた。男の子ですら、筆箱のチャックや鞆の取っ手に青いビーズでできた似たようなものをぶら下げている子が何人かいた。先生に見つかれば叱られるだろうに、いつの間にかこんなものがそんなに流行ったのかと、④私は首をひねった。こうした流行というものが、どこから湧き出てクラスの子達に浸透していくのか、私にはいつもわからなかった。

②加賀谷さんですら手首に似たようなものをつけていて、してないのは③塚本瀬里奈と自分くらいだと気づいた私は、さすがに少し焦り、⑤その日は紺色のトレーナーの袖を不自然に引っ張って手首を隠しながら過ごした。

その日の放課後、私は早速、近くの手芸店にいき、それっぽいビーズを探した。本当に欲しいわけではないので、どれが可愛くてどれが冴えないのか、さっぱりわからなかった。

無難そうな水色と白のビーズを買い、私は本屋に行つて、④早野さんたちがよく読んでいるようなファッション誌を立ち読みした。そこには麗ちゃんがつけていたのよりもずっと高度な、複雑に編まれたブレスレットがたくさん載っていた。

⑥私は面倒になり、雑誌を閉じて本棚に戻すと、家に帰って髪の毛用のゴムで適当にビーズを交互に紡いだ。出来上がったブレスレットは貧相でお世辞にも可愛いとはいえなかったが、クラスの子がぱっと見たときに、あの子は「つけてない子」じゃないんだ、とさえ思ってもらえればよかった。

学校という場所はスーパードライのようなもので、私達は陳列されているのだと、私はようやく気づき始めていた。私達を評価するのは大人たちだと、私はずっと思っていて、いい子であるようにつとめていた。けれど、⑦本当の買い手は生徒たちの方だったのだ。そして、そのことにずっと前から気づいて準備をしていた子たちに、私はいつのまにか随分置いていかれていたの



(一)——①「そうか、うん、うん、シューベルトはやっぱりいいだろう」とあるが、ここでの父の考えについて説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 娘が実際にはCDを聞いていないのではという疑いを晴らすため、シューベルトの名を出して反応を探っている。

イ 自分の与えたCDを聞いたと娘がうそをついたので、あえてだまされて娘を傷つけないようにしている。

ウ 情操教育のために買い与えた子ども向けのクラシックのCDを、娘がちゃんと聞いたと知り満足している。

エ シューベルトの良さを十分に説明することができるほど、娘が精神的に成長していることを知り感動している。

(二)——②「小さなサービス」とあるが、これはどうすることか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 母の機嫌が良くなるように、母から言われたことを言われた通りにすること。

イ 母を喜ばせるために、母が見ていないところでも居心地のよい空間を作ること。

ウ 母に満足してもらうために、自分から進んで母の指示以上の成果を出すこと。

エ 母の不満を解消するために、母に言われていないことも自分から行うこと。

(三)——③「へえ、そうなんだ……可愛いね」とあるが、このときの律について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 自分が知らない間に麗ちゃんと久美ちゃんとがおそろいのブレスレットを作っていたことはショックだが、自分の気持ちを知られたくないので、平気なふりをしている。

イ 本心ではビーズのブレスレットにはまったく興味が持てないのだが、麗ちゃんの機嫌をそこねるとあとが面倒なので、ほめることで機嫌をとろうとしている。

ウ 麗ちゃんのつけているビーズのブレスレットは他の子のブレスレットほど可愛くはないと思っているのだが、その考えが相手にばれないようにごまかそうとしている。

エ クラスの女の子たちがつけているブレスレットの魅力が自分にはわからないのだが、その気持ちをそのまま言ってしまうわけにはいかないので、興味があるふりをしている。

四——④「私は首をひねった」とあるが、このときの律の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 見つかったら先生に叱られそうなものが知らないうちに男女問わず広まっていたので、流行というものの出どころや拡大の早さをつかみかねている。

イ 数えてみるとあまりにも多くのクラスメイトがブレスレットをつけていたので、知らない間に自分は仲間はずれにされていたのではないかと不安になっている。

ウ ばれたら叱られるとわかっていながらブレスレットをつけている人があまりに多いので、流行に乗りたいという人の気持ちの強さにとまどっている。

エ 自分と仲が良かったはずの麗ちゃんまでもが華やかな女の子たちと同じ仕草をしたので、自分とはちがう世界の人になつてしまったのではと疑いを抱いている。

五——⑤「その日は紺色のトレーナーの袖を不自然に引張って手首を隠しながら過ごした」とあるが、律は何のためにこのようなことをしたのか。四十字以内で書きなさい。

六——⑥「私は面倒になり、雑誌を閉じて本棚に戻す」とあるが、なぜそうしたのか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 律にとってはブレスレットをつけているかどうかだけが重要なので、無難なビーズを買い、いったんは雑誌を参考にしようとしたが、複雑なデザインが多く、ここまでのものを作ろうという気持ちにはなれなかったから。

イ 律は自分がブレスレットをつけていない子でなくなればいいと考えているだけなので、雑誌の真似をして作ろうと考えたが、麗ちゃんよりも複雑なデザインのブレスレットを作ると嫌われるかもしれないと思ったから。

ウ 他の女の子のようにブレスレットをつける必要があると感じた律は、作り方を覚えるために雑誌を開いたが、複雑に編まれたブレスレットの写真ばかりで作り方については載っておらず、役に立たないと思ったから。

エ 律は自分がブレスレットをつけていないから仲間はずれにされたと考え、周りから浮かないデザインを確認しようと思つて雑誌を見たが、周りにここまで複雑なブレスレットをつけている子はいないのでむだだと感じたから。

(七)——⑦「本当の買手は生徒たちの方だったのだ」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 律はこれまで、先生に良い成績をつけてもらえるようにふるまえば平和に生活していけると考えそうしてきたが、実は子どもである同級生こそが人を評価するという点では容赦のない存在であると気づいたということ。

イ 律はこれまで、大人にいい子だと評価されるようにふるまえば無事に学校生活を送っていけると考えそうしてきたが、実は自分と同じ子どもである同級生こそが自分をきびしく評価する存在であると気づいたということ。

ウ 律はこれまで、大人に気に入られてさえいれば学校生活は何事もなく過ごせると考えそうしてきたが、実は大人よりも同級生こそが自分の考えを尊重してくれず自分に辛い思いをさせる存在であると気づいたということ。

エ 律はこれまで、先生にほめてもらってさえいければ学校では問題なく過ごせると考えそうしてきたが、実は大人よりも同級生こそがクラス内の情報を裏で操作しているおそろしい存在であると気づいたということ。

(八)——⑧「これも学校の勉強なんだよお母さん」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 律にとって学校の勉強には同級生と上手に過ごす方法を身につけることも含まれており、特に女の子たちの話題についていけないと自分だけが置いていかれてしまうことから、流行を知っておく必要があるということ。

イ 律にとって学校の勉強には周りとは合わせられる社会性を学ぶことも含まれており、女の子たちは学校で次に何が流行するのかを常に考えていることから、先回りして次の流行を予想し、準備しておく必要があるということ。

ウ 律にとって学校の勉強には深い友情の築き方を学ぶことも含まれており、周りの女の子たちに評価されないと居場所を失ってしまうことから、音楽番組の情報を整理することで評価してもらおう必要があるということ。

エ 律にとって学校の勉強には周りから評価される行動を学ぶことも含まれており、学校の女の子たちが流行に乗っていない子を見下すことから、自分も見下す立場になれるよう流行について勉強する必要があるということ。

(九) 本文の表現の特徴を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 家での場面と学校での場面を繰り返すことで、律が友人と家族のどちらを大切にしているかが分かるようになっていく。
- イ 常に律の視点から物語が進められていることで、それぞれの場面における律の心情が読み取れるようになっていく。
- ウ 場所や時間の変化がはっきりと示されることで、律の二面性のある性格が読み取れるようになっていく。
- エ 律と家族との会話を繰り返し書くことで、律の居場所が家庭にしかないことが分かるようになっていく。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「自信」とはいったい何なのか。いよいよ気になった私は、つい先日、大小いく冊かの国語辞典を引いてみました。そんなに長い間気になっていたなら、なぜもつと早く引かなかったのか、と言われそうですね。言われてみれば、確かに、とは思うものの、煮詰ま<sup>ひ</sup>つてからでなくては、この定義をしかと定義として受け取ることができなかつたかもしれない、今は思いません。これは言い訳かな？

それはともかく、『広辞苑』(岩波書店)や『大辞林』(三省堂)から始まって、「自信」ということばを引き始めた私は、最後にと残しておいたいちばんよく使う『新明解国語辞典』(三省堂)を引いて、<sup>①</sup> 思わず膝<sup>ひざ</sup>をたたいて笑いだしてしまいました。「そうか。まさにこれだ!!」、「よくぞ言ってくれた!」と思つたのです。そこにはこう記してありました。

「確かにうまくやるのが出来る(た)であろうという自己評価」(第四版第一刷、一九八九年一月一〇日発行)。続いて、同じ辞典の第六版第一刷(二〇〇五年一月一〇日発行)を引けば「そのことをまちがいに、うまくやるのが出来るという自己評価」と、さらにすつきりと明解になった定義が記されています。

角川書店発行の『必携国語辞典』も、『広辞苑』、『大辞林』より少しはましですが、でもこの定義にはかないません。『新明解』がすてきなところは、「自分の才能・価値を信ずること。自分自身を信ずる心」(『大辞林』)とか「自分の能力や価値を確信すること。自分の正しさを信じて疑わない心」(『広辞苑』)などにある「信じる」という曖昧<sup>あまい</sup>なことばから全く自由になつて「自己評価」ということばをきつぱりと打ち出しているところだ。

「これでなぞが解けた!」と私は思いました。なぜこのことばが年々、自分には縁<sup>えん</sup>のないことばとして遠ざかつていつていたか。なぜ、自信なんて、あつてもなくてもどうでもいい。いやむしろ邪魔<sup>じゃま</sup>かもしれない、と思うようになってきていたか。もつと言えれば私は<sup>②</sup> 「自信」なんてくそくらえ!」とさえ言いたくなつてきていたのです。

私は長い教師生活の中で、自信が持てないと嘆<sup>なげ</sup>く若い人たちに、いやというほど会つてきました。一方では、自信満々の人たちにもまた。たとえば外国語が周りの人よりうまく話せたり、いわゆる「容姿端麗<sup>ようすたんれい</sup>」だったり。あるいはある分野の事情に他人より通じていたり。ところが自信が持てないという人だけでなく、自信満々<sup>③</sup> キャンパスを<sup>④</sup> 闊歩<sup>かつぽ</sup>する人も、実はいつも不安を抱<sup>かか</sup>えていることに、私は次第次第に気付くようになりました。自信がない、という人も、何かが他人<sup>ひと</sup>よりできるよ

うになったとたん、自信を手にするのですが、手にすればしたで、またそれをいつか失うのではないかという不安にどうやら若者たちは取り憑かれてしまうようです。いいえ、若い人たちだけでは。四〇代、五〇代になってもそういう不安を抱え続ける人に、私は大勢会ってきました。何か、他人よりできれば自信が持てて、できなければ自信が持てない。その時の「自信」って何なのだろう。そんなに「自信」のあるなしで振り回されるなら、いつそ自信などと縁を切ってしまったものではないか？ 私には、「自信」が人を幸福にするとは、次第に思えなくなってきました。

でも、「自信」を持つのはいいこと。必要なこと。そういう声はいたるところで聞かれるのに、「自信」に疑義をはさむ声には、なかなか出会えません。それで、ようやく、いえ、ついに辞書を引く気になったのでした。

いや、③「自己評価」には参りました。④脱帽です。これで納得がいききました。自信がある、と自ら言う人、あるいは自他共に認める人が、なぜ周囲の人々を幸福にするのを見たことがなく、むしろ目に入る風景といえは、周囲の人々を見下しているように感じられる場合がほとんどだったかということが。なぜ、そういう人に④アグレッシブなものを常に感じざるを得なかったかということが。にもかかわらず、いえ、だからでしょうか、前にも記したようにそういう人々に常に不安の影を見てとらずにはいらなかったことが。そうです。「自己評価」に何の価値がありました。もちろん他人による評価にも、ですが。

学校というところは、いつも何かができるか、できないかで評価される場所です。社会もおおむね、そうです。いえ、できるか、できないかだけならまだいいのですが、そこに「他人と比べて」が入ります。他人と比べて少しでも何かが優れていると見るや、自信||自己評価は高くなり、劣っていると感じると、自信はたちまちしほみ、自己評価は低くなります。そんな自信って、持つ必要があるのでしょうか。そんなものに振り回されてしまうなんて、④愚かとは思いませんか？

などと偉そうなことを言ってしまうましたが、実は私自身、この問題で振り回されそうになったことがあるのです。自信とはまるで縁なく生きてきたはずだったのに。

それは三〇代の初めに私の書いた評論がある「新人賞」をいただいた時でした。驚いたことに、そのとたん、その分野の全国誌から原稿依頼が舞い込むようになりました。それまでは、東京の研究会などに出ても、誰からも声をかけられることなどなかったのに、先生と呼ばれる有名な人々からさえ声をかけられるようになりました。私は周りの空気が変わったのを感じました。

⑤ あぶない、と思いました。このままいくと、外からの評価にやられてしまう、と思ったのです。私は必死に自分に言い聞かせました。「受賞する前と後でおまえの書いたものが変わったわけではないのだよ」と。賞をいただけこうといたたくまいと、書いたものは全く変わらず、ただただそこにあるのです。私自身だって、同じでした。受賞したからといって立派になどなるわけではない。私は書かずにいられなかつたことを書いただけで、昨日と同じ自分がそこにいるだけでした。変わったのは私をとりまく外側の世界だったのです。それも全体からみればごく限られた人たちのさらにほんの一部が——もしかしたら、その人たちのどうでもいい一部だけが——針の先ほど変わっただけかもしれないのです。そんなものに自信を与えられたり、奪われたり……。今思えば、私はあの時、ばかばかしい、と（１）はつきり思ったのかもしれない。その時かぎりの無責任な評価なんて少しも本質的なものじゃない。そんなものに、左右される「自信」もまた、と。

もしかしたら、たとえば学生の就職活動にも同じことが言えるかもしれないね。何回も面接を受けたのに全部はねられた、生きていく自信がなくなった、と言って自殺する若者がかなりの数にのぼるとか。そんなことにあなたは自らの命を奪わせてはなりません。就職試験に落ちるのは、あなたのせいではないのですもの。採るほうは、あなたが命をかけるほどに命をかけてやっているわけではない。（２）外からの評価はあなたの本質とは無関係で、落ちたからといって、（３）責任を感じたり、自分を責めたりする必要はないのです。採用試験に受かったからと自信を手にし（自己評価を高め）、落ちたからと自信をなくす（自己評価を低める）としたら、あなた自身はいつどこにいますか？ そこまであなた自身を放棄してしまつていいものでしょうか。それって同じ論理でいくなら、もし就職試験に受かったら、

X
---

 ということでしょう。なんとあさましく、なんと馬鹿げたことでしょう。

（清水真砂子『大人になるっておもしろい？』）

① キャンパス……大学などの構内。

② 闊歩……堂々と歩くこと。

③ 脱帽……敬意を表して、帽子をぬぐこと。ここでは、感心し、認めること。

④ アグレッシブ……攻撃的。積極的。

(一)——①「思わず膝をたたいて笑いだしてしまいました」とあるが、筆者はなぜ「笑いだして」しまったのか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 筆者はその他の辞書における自信の定義に完全には納得がいていなかったため、最後に引いた辞書が自分のなんとなく感じていたことをうまく説明していたことが痛快だったから。

イ 筆者はその他の辞書における自信の定義が間違っていると考えていたので、最後に引いた辞書のおかげで自分のこれまで考えてきたことの方が正しかったとわかってうれしかったから。

ウ 筆者は自分が長い間辞書を引かなかったことを反省する一方で、いちばんよく使う辞書を最後まで残しておいた自分にはおかしなこだわりがあると気づいて驚いてしまったから。

エ 筆者はその他の辞書における自信の定義とまったく違う独特な表現の仕方をしている記述をみて、自分のよく使う辞書が普通とは違う変な辞書だと知っておかしく思ったから。

(二)——②「『自信』なんてくそくらえ!」とさえ言いたくなってきた」とあるが、このように述べている筆者の考えとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 自信は他人に勝った時に手に入るが、それを持ち続けるためには常に他人に勝ち続けなさいといけない。自信と縁を切る方が、本当の自信が手に入る。

イ 自信は他人との比較の上で初めて手に入るが、年齢を重ねるにつれ自信を失うことへの不安は増えていく。自信が人を幸福にするとは思えない。

ウ 自信は他人より何かが優れている時に手に入るが、自信を失うことへの心配もまた生まれる。自信は我々を振り回すだけ、本当に大切なものではない。

エ 自信は他人より優位に立っている時に手に入るが、一方で簡単に失われてしまうものでもある。自信ではなく、自己評価こそが重要である。

(三)——③『自己評価』には参りました」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 自信を持つと周囲の人を必ず見下してしまうということが自己評価という定義に示されているから。

イ 自信を失う不安に打ち勝てば自信が持てるということが自己評価という定義に示されているから。

ウ 自信など自分の思い込みにすぎないのであるということが自己評価という定義に示されているから。

エ 自信は自分の力で見つかりたいというところが自己評価という定義に示されているから。

(四)——④「愚かとは思いませんか？」とあるが、このように述べている筆者の考えとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 誰にでも優れている点と劣っている点があるが、劣っている点の方が目立つのでそれを気にして自信を失ってしまうのも仕方がない。

イ 自分と他人とを比べて、両者の間の小さな違いに優劣をつけて自信を持ったり、自信を失ったりするのはつまらないことだ。

ウ 他人からの評価によって自信を持てるようになることもあるが、他人から評価されなくても自分に自信を持つことこそが大切だ。

エ 他人の評価など気にせず、自分には他人とは違う価値があるのだとひたすら自分に言い聞かせて自信を持つていけばよい。

(五)——⑤「あぶない、と思いました」とあるが、それはなぜか。「自信」という言葉を使わずに、五十字以内で答えなさい。

(六) (1) (2) (3) に入ることはとして最も適当なものを次から選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

ア いよいよ      イ いちいち      ウ なかなか      エ そもそも

(七) 

X
---

 に入ることはとして最も適当なものを次から選び、記号を○で囲みなさい。

ア あなたは受かった自分を褒め、他人のことは気にしない

イ あなたは受かった理由を、他人のおかげであると考え

ウ あなたは落ちた人に同情して、合格を譲ろうとする

エ あなたは落ちた人を無能呼ばわりし、優越感ゆうえつかんにひたる

(ハ) 本文の内容に合あわないものを次から二つ選えび、記号を○で囲かこみなさい。

ア 筆者は、辞書に載のっている自信の説明を読み比べることで自信という言葉に違ちが和感わかんを持ち、自信を持つことが良いことだとは思おもえなくななった。

イ 筆者は、長い教師生活の中で、自信が持てないと言う人だけでなく、自信満々に見える人でも実は内心で不安を抱かかえていることを発見した。

ウ 筆者は、自信に振り回されてしまったせいで幸福から遠ざかる人たちを見たことで、自信というものを信じられなくななった。

エ 筆者は、若いころから他人の評価に左右されされない強い信念を持ちそれを自信として生きてきたが、受賞によってゆらぎゆらぎそうにななった。

オ 筆者は、就職試験に落ちてしまうことは本人の本質とは無関係であり、落ちたからといって責任を感じる必要はないと考かんえている。

三 次の(1)～(10)の——を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 兄の謝罪にはいつだってセイイを感じられない。
- (2) 会社はリエキを追求するだけではない。
- (3) センゾ代々が住んできた家から引越す。
- (4) かぜをひいた母のコンビョウをします。
- (5) 友達と遊園地に行くには親のキョカが必要だ。
- (6) 若さをタモつために毎日運動する。
- (7) ずっとあこがれていた会社にツトめる。
- (8) あと少しのところで試合にヤブレた。
- (9) 国をオサめるために国民の声を聞く。
- (10) 日がクれる前には家に帰りましょう。

四 次の(1)～(5)の( )に適切な漢字一字を入れて四字熟語を完成させなさい。また、その四字熟語の言い表す状況に合

うものを〈例文〉ア～オから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。(同じ記号を二度以上選ばないこと)

- (1) ( ) 転八倒ぼつとう
- (2) 驚天動きょうてんどう ( )
- (3) 一 ( ) 一憂いちゆう
- (4) 千 ( ) 万来ばんらい
- (5) ( ) 方美人ほうびじん

〈例文〉

- ア 模試の結果が良いにしても悪いにしても、いちいち心が動かされてしまう。
- イ このアイスクリーム屋は大人気でいつも行列ができています。
- ウ 提案に賛成の人にも反対の人にも「私もあなたと同じ意見だ」と伝える。
- エ 有名なアイドルが結婚を発表して、世間は大騒ぎになった。
- オ 昨夜は突然の胃痛におそわれ、転げ回って苦しんだ。

【五】

次の(1)～(5)の各文の——を引いたことばと意味・用法が同じものを後のア～ウから選び、それぞれ記号を○で囲みなさい。

- (1) 友人が試験を受けるそうだ。  
ア そんなことを言ってはかわいそうだ。  
イ 来月の遠足では奈良に行くそうだ。  
ウ 妹は今にも泣きそうだ。
- (2) どんなにがんばっても宿題が終わらない。  
ア この本はあまりおもしろくない。  
イ コオロギと鈴虫の違いがわからない。  
ウ 机の上にあつたノートがない。
- (3) いきなり呼び出されてびっくりした。  
ア 歩いていると、ふと名案がうかんだ。  
イ 彼はとても強い思いを持っている。  
ウ うつくしい花が道ばたに咲く。
- (4) 冷蔵庫のプリンはわたしのだ。  
ア どうのこうの、言い訳をするんじやありません。  
イ 母の好きなおかしを買つて帰る。  
ウ 手に取つた教科書は理科のだつた。
- (5) わかつているのに何度も言われるのはつらい。  
ア 大統領が日本を訪問される。  
イ 朝型なので朝は早く起きられる。  
ウ チームメイトのプレーに救われる。

令和8年度

帝塚山学院泉ヶ丘中学校  
入学者選抜試験  
解答用紙

国語

受験番号

A

一

(六)	(五)			(一)
ア				ア
イ				イ
ウ				ウ
エ				エ
(七)				(二)
ア				ア
イ				イ
ウ				ウ
エ				エ
(八)				(三)
ア				ア
イ				イ
ウ				ウ
エ				エ
(九)				(四)
ア				ア
イ				イ
ウ				ウ
エ				エ

二

(七)	(六)	(五)			(一)
ア	1				ア
	アイウエ				イ
イ	アイウエ				ウ
					エ
ウ	アイウエ				
					(二)
エ	2				ア
	アイウエ				イ
(八)	アイウエオ				ウ
					エ
	3				(三)
	アイウエ				ア
					イ
					ウ
					エ
					(四)
					ア
					イ
					ウ
					エ

三

(6)	(1)
つ	
(7)	(2)
める	
(8)	(3)
れた	
(9)	(4)
める	
(10)	(5)
れる	

四

(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
漢字	漢字	漢字	漢字	漢字
例文	例文	例文	例文	例文
ア	ア	ア	ア	ア
イ	イ	イ	イ	イ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
エ	エ	エ	エ	エ
オ	オ	オ	オ	オ

五

(1)
ア
イ
ウ
(2)
ア
イ
ウ
(3)
ア
イ
ウ
(4)
ア
イ
ウ
(5)
ア
イ
ウ